

都市近郊酪農における自給飼料を考える

～おらが草地は空港にある～

(R3.6.30 愛知県酪農クラスター協議会事務局)

中部国際空港の滑走路周辺の草を刈り、半田市の牧場エル・ファーム・サカキバラがその草を知多牛の飼料として有効活用するという取り組みが始まりました。新聞や地元ニュースでも紹介されましたが、実現するまでには何度も打ち合わせをしたり、問題点の調整を行ったりと大変だったようです。これは一つの例であり、河川敷や企業の緑地帯など、案外身近なところに草地はあるかもしれません。SDGs の考え方が普及していく中で、他業種同士が歩み寄って協力できるこのような機会が今後増えていくのではないのでしょうか。



知多牛育てる中部空港の刈り草

年間200トン 廃棄から資源循環へ

中部国際空港（愛知県常滑市）の滑走路周辺の緑地帯に生えた草を刈り、知多半島の農場で飼育される知多牛の飼料として有効活用する取り組みが近く始まる。空港会社と農業生産法人のエル・ファーム・サカキバラ（同県半田市）が十一日、覚書を締結した。空港会社によると、緑地帯の刈り草は年間二百トン発生し、全て廃棄してきた。刈り草を資源循環の観点から有効活用しようと知多半島の農場に呼び掛けたところ、常滑、半田両市に農場があるエル・ファームが活用することになった。空港会社の委託先が離着陸のない時間帯に草を刈り、エル・ファームに無償で届け、飼料にならない刈り草も



2021年(令和3年)6月18日(金曜)

中部空港刈り草で知多牛すくすく

半田の農場協力 知多半島で飼料 敷料に

中部国際空港（常滑市）の滑走路付近の草を刈り、主に知多の飼料として有効活用の取り組みが始まった。空港会社が資源循環の観点から刈り草を有効活用しようと企画し、農業生産法人「エル・ファーム・サカキバラ」（半田市）が物別した。牛の寝床の敷料となる一部の刈り草は、南知多町の農家の堆肥として再利用する。（成田高憲）

十七日朝、滑走路からやや離れた緑地帯で、二台の草刈り機が作業していた。その後、十五日に刈った草とともに空港会社の委託業者がエル・ファームの知多農場（半田市）に運び、いん食へて食べさせてほしい」と期を寄せた。空港会社によると、緑地帯は、選ばれたばかりの刈り草を食べる肉牛や乳牛を員滑走路から外れた場合の緩衝エリアとして、年間二百トンに上る刈り草は委託先の廃棄物処理業者がこれまで処分してきた。空港会社は刈り草の有効活用を図って十日にエル・ファームと覚書を締結。空港会社が春から秋にかけて草を二度刈って無償で牛の飼料や敷料として届け、敷料の一部は南知多町のキヤベツ農家の堆肥にする。両社は、刈り草を食べた牛の乳製品や精肉などを中部空港内で販売することも計画している。空港会社の犬塚社長は「一日の覚書締結のあいだで」「商品化を積極的に検討していきたい」と意欲を見せた。

知多農場の代表取締役長 榎原は「三万平方メートル、一着陸帯と呼ばれる、航空機が滑走路から外れた場合の緩衝エリアとして、年間二百トンに上る刈り草は委託先の廃棄物処理業者がこれまで処分してきた。空港会社は刈り草の有効活用を図って十日にエル・ファームと覚書を締結。空港会社が春から秋にかけて草を二度刈って無償で牛の飼料や敷料として届け、敷料の一部は南知多町のキヤベツ農家の堆肥にする。両社は、刈り草を食べた牛の乳製品や精肉などを中部空港内で販売することも計画している。空港会社の犬塚社長は「一日の覚書締結のあいだで」「商品化を積極的に検討していきたい」と意欲を見せた。

(中日新聞 R3.6.12 掲載)



(中日新聞 R3.6.18 掲載)

← これは6月21日に名古屋の専門学校とリモート講座を行っている時の写真で、ちょうど中部国際空港から牧草が届いたところです。

牧草が届いてから発酵が進んでしまう前に利用できるよう、牧場内の作業スケジュールを組み立てていくことが今後の検討課題とのことです。